

イニシアティブ 3年間をふりかえって

教育プログラム推進委員会

平成17年度に採択された本教育プログラムも、3年目が終わろうとしています。本プログラムでとりわけ力を注いだのは、履修指導体制面でのコースワークの充実、研究教育支援環境面での自主的研究活動の促進などです。前者では新カリキュラムを本格実施しました。新設した研究マネジメント群とキャリア形成群について、学生の7割が役立つと評価しています。後者では、大学院生の自主企画による研究セミナーの実施があげられますが、この試みによって、学生は、企画、運営、広報から実施後の総括、報告までのさまざまな技能を習得することができました。もうひとつ、情報交流型FDという教員と院生の双方を主体とするFDの実施も本学独自の試みであります。将来教育に携わる存在である院生の研究・教育能力を高めることで、教員のより一層高い水準への達成の自覚をもたらすことを狙いとしたわけです。

以上のような試みを含むわれわれの取り組みは、文科省の事後評価においても「目的はほぼ達成された」という高い評価を受けました。

今後の課題としては、ひとつには、イニシアティブ活動の常態化ということでしょう。これまで、本プログラムは、関連専攻の多くの教員が積極的に部会活動等を担って、いわば特別体制で強力に推進されてきました。上述以外でも、研究指導体制面でのプロセス管理の強化と充実など、本プログラムはまさに先導役（イニシアティブ）となって研究科全体の活動の充実に貢献してきたのです。今は、本プログラムを日常体制として深く静かに定着させるときだととらえています。

イニシアティブに 取り組んで

「ユニークな大学」

麻生 武

博士前期課程 人間行動科学専攻長



奈良女子大学の大学院をどのように改革していけばよいのか、というのは大きな課題だと感じています。博士課程に入学する学生の多くは社会人です。すでに研究職に就いたり社会で活躍されているので、学位取得後の心配はあまりなくてよいという良さがあります。できれば修士課程から進学してくる学生さんも少しは欲しいというのが正直な気持ちですが、修士課程を修了した学生のほとんどは、教育や福祉、スポーツ、臨床発達や臨床心理の現場に巣立っていっています。また、学部の卒業生の多くは一般企業へ就職します。つまり、博士課程、修士課程、学部の3部門が異なる雰囲気になり、うまくつながっていない面もあるのです。幸い今年は、学部から修士課程に進学する者が多いので、学部と修士課程がつながってくれたらと願っています。

人間行動科学専攻の分野は多岐にまたがっています。私自身の専門（心理学）においても実に巾が広いので、学部、修士課程、博士課程と研究テーマや方法も一人一人まちまちという傾向があります。狭い意味での講座制で縛り付けたりは全くしていないので、自由な分それだけ、縦のつながりが少なくなるともいえます。大学院大学でも学部教育重視の大学でも、どちらでもない大学のユニークさ、つまり「不用の用」を売るという苦肉の策が、意外と新鮮かもしれません。



イニシアティブ関連新規開講科目の紹介

研究者はもちろん、広く社会に出ると自身の行っている研究や仕事の内容を他者に伝えねばならない機会が数多くあります。この時、発表の趣旨に沿い、与えられた時間内で、聞き手がどのような人達かを考慮して、理路整然と分かり易くプレゼンテーションを行うのは重要なことであり、そのような経験を積むのは大変よい勉強になります。そこでこの授業は、大学院前期課程のレベルで、学術研究でのテーマで発表演習をし、プレゼンテーション能力を高めることを狙っています。

演習の内容は、卒業論文や現在の研究テーマなど、あらかじめテー

プレゼンテーションの内容を問われることはあっても、その能力を問われる機会はなかなかないので、貴重な経験をさせていただきました。全体をどのように構成するか、見やすいパワーポイントの作成方法といった効果的な発表の仕方を自分のプレゼンテーションを通して学ぶことで、実践的な力を身につけることができたように思います。

学部卒業論文や現在研究している内容を発表するのですが、他の分野の方もいらっしゃるの、短い時間でいかにポイントをわかりやすく伝えるかが大切だと実感しました。自分のプレゼンテーションの短所をご指摘いただいて初めて気づいたり、他の方のプレゼ

私の研究

私は「放課後子どもプラン」における学童保育のあり方について研究しています。学童保育は長年、女性の社会進出とその子どもの健全な成長を支えるための事業として機能してきました。また近年少子化対策としてもこのような子育て支援施設の充実が重要であると考えられます。

しかし2007年度からはその学童保育が、「全児童対策」と呼ばれる全ての子どもたちが安心して遊べ、充実した放課後を過ごせるようにと実施されてきた事業と統合され、新事業「放課後子どもプラン」としてスタートすることとなりました。2つの事業が同じ小学生を対象としていることからこのような施策が計画されたわけです

「学術プレゼンテーション演習」

鍛冶幹雄

社会連携担当 教授



マを各自設定し、必ずしも発表者と同じ専門ではないイニシアティブ受講者を対象に、15~20分程度のプレゼンテーションを行い、教員からのコメントを受けるとともに、受講者からもコメントをもらいます。このコメントをもとに、後日、修正プレゼンテーションをするということを原則2回繰り返します。

発表態度や声の大きさから始まり、論理構成や強調点の伝え方のポイントの会得、少し離れた立場から研究をみたコメントからの気づきなど、発表者が確実に力をつけていくのが実感できる授業となりました。

「学術プレゼンテーション演習」を受講して

仲川宏美

博士前期課程 人間行動科学専攻1回生

ンテーションから「自分もこうしよう」と学んだりすることが多かったです。何をどのように改善すればよいかを具体的にアドバイスしていただいたことは大変参考になりました。また、他の専攻の方と受講することができて、いい刺激にもなりました。

鍛冶先生が「研究内容に自信をもつと、プレゼンテーションがよくなる。いいプレゼンテーションをするには、いい研究をすることが大切だ」ということをおっしゃったのが印象的でした。今回、「学術プレゼンテーション演習」を受講して得たものをぜひ今後の研究活動に活かしていきたいと思えます。

「放課後子どもプラン」と学童保育

松本歩子

博士前期課程 住環境学専攻1回生



が、どのように統合し、学童保育機能をいかに位置づけるのかは各自治体の判断にゆだねられています。

今、私は「全ての子どもが平等に」という言葉のもと、遊びや体験の場のみが提供され、かつての学童保育が担ってきた家庭に変わる生活の場としての機能が失われてしまうのではないかとすることに危機感を持っています。そのため各自治体の事例を調査し、その実態から学童保育機能をどのように位置づけ、全児童対策とどのように関係づけていくことが子どもたちの成長にとって望ましいのか、そのあり方を模索しています。

イニシアティブ関連新規開講科目の紹介

「グローバル社会における女性研究者」



西堀わか子

国際交流センター 教授

この科目は、博士後期課程の科目群「キャリア形成群」に含まれる科目で、平成18年度の開講です。授業タイトルからも分るように、女性研究者のキャリア形成について示唆を与えることを目的に授業を組み立てています。

授業は、複数のゲストスピーカーが担当します。ゲストスピーカーは、次の3条件を持っておられる方ということでお願いしました。
①現役の研究者 ②女性の地位向上やキャリア形成の面で、国、国際機関、国際的なNPO等の仕事にも積極的に参画している方 ③職歴が出来るだけ豊富な方。このようにした理由は、講義者自身のキャリア形成の過程が一つのロールモデルになるのがよろしいという判断からでした。3名にお願いし、お一人2コマを土・日集中で実

施しています。社会人学生の受講が多いことを考慮し、このようにしています。

講義で取り上げているテーマは次のようです。1. 女性研究者自らが研究環境改善に取り組むために必要な知恵とネットワーク形成一特に国レベルの学術会議（アカデミー）において 2. 研究機関と国連などの実践機関間を行き来しながらキャリアを積み上げていく女性たち 3. 日、韓、米の女子大学比較と女性研究者を育成するための女子大学の役割。講義では、統計、調査結果、ご自身の経験などを紹介することにより具体性を持たせ、受講生が自己のキャリア形成の道筋を想像し、かつ創造できるよう配慮しています。

「グローバル社会における女性研究者」を受講して

菊池慶子

博士後期課程 社会生活環境学専攻1回生

今回の講義では、その内容はもちろんのこと、3名の先生方のバイタリティーあふれる姿を間近で拝見させていただくことができ、非常に多くの刺激を受けました。

橋本先生には、女子大学の存在意義を問うことで女性研究者が女子学生に与える影響力の大きさを示していただき、女性研究者が増えることや私たち自身がその一員となることの重要性を教えてくださいました。三輪先生は、研究を実践に活かす方法とその意義、そしてその難しさをご教示くださいました。また、そのなかで、国際公務員をはじめとしてグローバルに精力的に活動をしている、非常

に有能な女性研究者たちの存在を知ることができました。原先生からは、研究者、特に女性研究者は自分の研究に目を向けるだけではなく、自分が研究しやすい環境づくりのために何が必要か、何に目を配るべきかという視座を与えていただきました。

今回の講義では、女性研究者には多くの可能性があり、そのあり方は多岐にわたるということを学ぶことができ、私自身、大きく視野が広がりました。今後もこのような機会を利用して多くの刺激を受けながら、自分に必要な研究環境づくりを行うとともに研究を進めていきたいと思います。

私の研究

「中国・新疆におけるウイグル族女性のリプロダクティブ・ヘルス/ライツ」



ラヒラ・ママティ

博士後期課程 社会生活環境学専攻2回生

私は、中国・新疆ウイグル自治区に居住するウイグル族女性のリプロダクティブ・ヘルス/ライツ（以下、R・H/Rと略す）について、避妊・中絶という側面から研究をしています。

1994年国際人口開発会議（カイロ）以後、中国の計画出産政策は、人口抑制から健康促進へと移行し、避妊方法の提示からインフォームド・チョイスへと変革されました。同時にR・H/Rについての研究も、各地で行なわれるようになりました。

とりわけ、中国最大の少数民族自治区である新疆ウイグル自治区（13民族が居住、55%以上がイスラム教を信仰）では、R・H/R研究の必要性が指摘されています。この自治区では特に農村地区で妊娠、

出産に伴う疾病障害等の罹患率が高く、避妊はもっぱら女性にだけ課され、また中絶が中国全体の平均より高いという現状があります。

これらは様々な原因によってもたらされる現象でしょうが、特に、避妊などは女性の側の問題とする古い考え方が根強くあるためと考えられます。伝統的な性別役割意識が、女性には自分自身の健康上のリスクを拡大させ、また新疆のR・H/Rに影響を与えているのです。

私は、新疆全体のR・H/Rに関する意識の促進と現状を改善させるためには、まずウイグル男女の避妊や中絶に関する意識を把握することが重要であると考え、現在その調査に取り組んでいます。





大学院生の自主企画研究セミナーⅠ 「シルクロードのひとびとPART2 –新疆におけるウイグルの生活と文化の今昔–」

古澤 文

博士前期課程 地域環境学専攻2回生

昨年度に引き続き、中国・新疆ウイグル自治区に暮らす人々の生活と文化をテーマにセミナーを開催しました。中央大学の梅村先生からはバザールとその周囲に広がる農村との相互的な関係について、鍛冶職人の視点からお話していただきました。

新疆で水産業ビジネスを展開していらっしゃる柗谷氏からは、降水量が少なく四方を山に囲まれた内陸の新疆における水産業の現状について、ご自身の体験とともにお話していただきました。

後半は学内の院生2名の研究発表を行い、留学生のラヒラ・ママティは当地において取り組み始められた女性のリプロダクティブ・

ヘルス状況について、また鷲尾からは「歌と踊りのふるさと」と呼びならわされる新疆における民間舞踊の多様性について発表をしました。当地に生きるひとびとの状況について、さまざまな視点から学び、当該地域への理解がより一層深まった貴重な機会を得られたと感じています。

日 時：2007年10月27日(土) 13:00～17:00 於：本学・大集会室(大学会館2階)

参加者：講演者2名、本学教員2名、本学院生・学部生10名、学外者18名、計32名



大学院生の自主企画研究セミナーⅡ 「いかに活かすか再チャレンジ！ –社会人大学院生に求められるもの–」

室谷雅美

博士後期課程 社会生活環境学専攻2回生

社会人に門戸が開かれ、社会人大学院生が増える一方で、助成金の申請には年齢制限があるなど、研究費を得るのは困難です。社会人が仕事をしながら学業に専念することには、このようにさまざまな問題点があることから、20年前に社会人大学院生を経験された武蔵大学の国広陽子先生をお招きし、先生が社会人大学院生として学ばれたときの体験や、大学に勤務されている日々の経験のなかで感じられたこと、問題点・課題などをお話していただきました。この

セミナーによって、社会人大学院生のネットワークづくりのきっかけができました。

日 時：2007年12月21日(金) 13:30～15:30 於：生活環境学部会議室(A棟2階)

参加者：講師1名、本学教員1名、本学院生8名、学外者4名、計14名



学生による国際的研究セミナー 「日本と台湾のまちづくり研究交流セミナー」

柳井妙子

博士後期課程 社会生活環境学専攻2回生

台湾・東海大学日本語学科が台湾の窓口となり、日本語と中国語の二ヶ国語によるまちづくりセミナーを実施しました。台中市中心に市民団体、NPO団体、他大学で法律や観光を学び第二外国語として日本語を選択している学生たち約90名が外部から参加してくれました。

「まちづくり」に関しては台湾より日本の方が実践活動、研究が進んでいたという歴史的背景があるため、「日本のまちづくり」の事例発表に対して、台湾の地域を何とか活性化したいと考えている団体の参加もありました。質疑応答を通して、日本と台湾との共通

した問題も見られ、今後もネットワークを広げながら課題解決に向けて継続して交流をしていくことの重要性を確認することができました。

日 時：2007年12月15日(金) 於：台湾(台中市)東海大学図書館会議室

参加者：奈良女子大学5名、東海大学20名、岐阜大学1名、外部者90名

(上記人数は講演者10名を含む)

学生への 研究支援

本プログラムでは、研究成果公開援助や自主企画による研究セミナー企画援助など、今年度も多くの研究支援が行われています。その中から新規事業について紹介します。

◇学会大会参加費助成：学会大会で発表した場合の大会参加費助成

◇国際的な研究セミナー開催助成：海外から研究者を本学に招いた研究セミナーや、学生が海外に渡航し、現地で開催する研究セミナーの助成

◇国際的FD視察交流研修助成：海外での先進的取り組みの情報収集・研修並びに研修成果に基づくFD報告会の開催助成

※ 詳細は、ホームページ <http://www.nara-wu.ac.jp/initiative-life/information.html> をご参照下さい。